

子育てを考える その5

年長(年少)のうそ

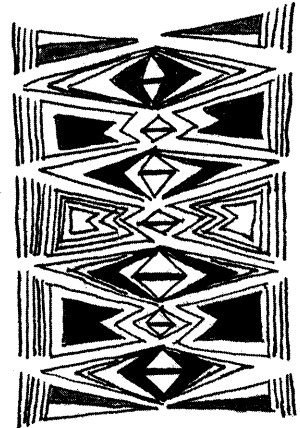
—家庭内の人間関係の縮図—

飽田 典子

事例1 超自我が育たなかった一郎君

学校へ行きながら、お金のルーズ、うそをつく、あきっぱい。これは今年三つ目の高校に一年生として在籍している一郎君が、学校から教育相談を勧められてやってきた時の相談した内容でした。

お母さんとしては学校に行きたがらないことを除けば、他人様に相談するほどのことではないように思っているのですが、担任の先生があまり熱心に勧めるので、一度行っておかねばとの義務感から相談を申込んだようでした。



た。

○お金が元のトラブルで友だちを失なう

三つ目の高校というのは、彼は毎年受験をして高校に入学するのですが、親しい友だちが来ると、その友だちとお金が元のトラブルを起こして学校に行きにくくなり、途中で辞めてしまうということをしくり返してきました。

今回も夏休みにコンピューターの会社でアルバイトをしたことをよいことに、何人かの友だちにパソコンが安く手に入るともちかけて大金を集め、それを使ってしまった。という詐欺まがいの事件を起こしたことが発端でした。

この前にいた学校では、お母さんが定期代と言って渡したお金をあつと言う間にゲームセンターで使い果たしてしまい、その穴埋めに友だちから毎日の交通費を次々と借りながら、返すことをしなかったようです。それで、彼にお金を貸したら返らないと評判になって学校に

行きにくくなりやめたということです。その上一学期の途中で実際には行かなくなってしまった彼ですが、毎朝定刻に大きな袋を持って家を出るので、お母さんは彼の欠席を一学期末に学校から言われるまで知りませんでした。

○「借りたお金は返す」ことを知らない。

このように彼のうそを数えあげたらきりがありませんが、今までの様子を聞いて担任の先生が問題視したのは、人から預かったお金を使ってしまいがらその後も平気でその友だちのところへ行く罪の意識のなさでした。が、相談の担当者としては、それに加えて持ち物の自他の区別のなさも深刻に思われました。一度自分の手に渡ったならばそれがどういう意味をもつお金であるかということとは消え失せて、「自分のもの」になってしまいうトリックは、ふつうこの年齢になるととくに卒業して使えないはずなのですが、彼はいまだに打出の小槌をもつ魔術師でもあるかのように、お金のルールがわか

っていないようでした。

彼と話してみますと、知識としてはうそをつくことはいけないことだということはわかっているのですが、自分でもよくわからないうちにうそになっているとのことです。明らかに相手をだます目的の意図的なるそも問題ですが、彼の場合はこの自覚のなさが問題といえるのではないのでしょうか。

○事なかれ主義のお母さん

こうした彼の問題行動も実はお母さんだけが知っていることで、お父さんには内緒のことでした。そして今回の相談のきっかけも、担任の先生が事の重大さを感じたが故に得られたようなもので、お母さん自身は他人様に相談するような事ではないという認識でした。ですから彼は今年この担任の先生と出会わなかったら、このままお金にルーズでうその多い人間として成人するおそれが大きかったように思われます。

このお母さんの事なかれ主義は夫婦仲の悪かった自分

の両親を見て育つうちに、長女で四人きょうだいの総領という立場から自然に身についたものようでした。たとえば、毎年夏休みになると両親の郷里に遊びに行くのですが、母親の実家でお土産を出す時、いつも母親が耳元で「お父さんには内緒だよ」とささやくのです。それがずっと子供心にどうしてか疑問だったのですが、小学校四年生の時初めてその意味が理解出来たということです。すなわち、父親の実家よりも、自分の実家に多くのおみやげを持参することを口止めする意味が込められていたのでした。それ以来このお母さんは自分の周囲で不思議な事、不可解な事が起こっても、真相をつきとめようとしたら困る人がいるのではないかという気がして何も聞けなくなってしまうといいます。

○子育ての上では、超自我の形成に失敗

一方、彼のうそはいつ頃から始まったかをたどっていきますと、お母さんの記憶は定かではありませんでしたが、確か小学校の低学年からではないかとのことでした。

というのはその頃、学校の先生から彼は学級の子どもたちから「きらいな子」として名前があがっていると云われたことがあり、それは今だに忘れられない先生の一言としてお母さんの記憶にあったからです。その時の先生の説明では忘れ物をして彼が友だちから借りている立場なのに、持ち主が使おうとするといやな顔をしたり、なかなか返さないもので、嫌われるようになったのではないかとのことでした。

この時自分が彼にどのように対応したか、このお母さんはいくら思い出そうとしても思い出せないというのです。

今から思うとこの時既に今日の問題性が提起されていたように思われますが、問題であるということを確認する回路が故障している場合は発見が遅れ、その結果彼に自他の区別あるいは、物事の善悪を判断する超自我が育たなかったのではないかと思われました。

事例2 親の生き方の鏡としてのうそ

——本心を偽っての生活に終止符を——

中学二年の花子さんは、中学生になった頃から家出をするようになり、最近は特に頻繁です。ある時は新聞配達の学生の所にいたり、暴走族のお兄さんのところにいたり、大体は一人暮らしの若い男性のアパートで発見されることが多いのですが、両親で迎えに行くと相手の男性がびっくりするのです。

というのは彼女はそこに置いてもらうのに「両親が離婚してお母さんと暮らしているんだけど、お父さんが欲しい」とか、「お父さんが無理ならお兄さんでいい」、あるいは「お父さんが大酒飲みで朝からお酒を飲んで働かず、自分に乱暴をするので家に帰りたくない」など、その時々で思いつくそを並べ立てて相手の同情を求めているようなのです。かわい顔の女の子が自分の不幸を綿々と訴えると、たいがい若い男性は黙って二三日は泊めてくれるということです。さすがに四日、五日となると「ここにいること位連絡しておいた方が

いいんじゃないか」と言うようですが、中には「家から金を取って来い」とそそのかす者もいて、両親はこの一年半、彼女に振りまわされどおしでした。

○時と場所によって違う面を見せる彼女

こんな彼女ですから、どんなに反抗的な女の子が現われるかと内心恐れを抱いて相談の最初の日を待ちました。ところが両親に伴われて来た彼女は、従順な良家のお嬢さんといった雰囲気、反抗的なそぶりは微塵も感じられません。申し込みの電話で得られた情報から勝手に彼女のイメージを作り上げていた自分を愚かに思う一方、この違いは何を物語っているのだろうか、職業的な関心呼び起こされたことも事実です。

○なかなか本心を明かさない

花子さんとはもう一年以上のおつきあいになるのですが、時々行方不明になることもあって、他の人のように定期的な面接になりにくいのが現実です。そのためかな

かなか本当のことを話しあえる関係になれないことが、相談の担当者として、今の一番の悩みといえます。一見素直そうで、家出の話題に触れてもいやな顔をするでもなく、どこで何をしていたか、実にスラスラと語るのです。あまりの流暢さにかえって不自然さを感じるのです。が、初対面の人は好感をもたされてしまうようでした。ところがこうして長くつきあってみますと、どこまでが

本当のことなのか、彼女にとっては聞かれた時に答えるための用意された筋書きにすぎないのではないかと、といった疑いの目をもたせられることもしばしばです。こちらまでが疑いの目で彼女を見るようになっては、相談を引き受けている者として失格だと思うのですが、今だに家出をしたくなる気持、自分の家に対する気持、家出中に遭遇したいろいろな出来事などについて、彼女の心に触れるような話が出来ないのが残念に思われます。

○自分を殺して婚家に仕える母

花子さんの家庭はお父さん方の祖父母と両親と彼女の

五人家族ですが、同じ敷地内にお父さんの姉と弟の家族がそれぞれ家を建てて住んでいます。お母さんが嫁いできた頃は弟さんはまだ独身で一緒に暮らしており、お母さんは夫方の一人一人に気を使い、誰からも非難されないようにと神経をすり減らす毎日でした。その上お婆さんは人一倍きれいで好きで、彼女が生まれると、おっぱいを吐いて家の中がミルク臭いのを嫌がり、汚れたおむつの置き方まで注意した程です。彼女が少し大きくなると食事の時物をこぼしたり、外で遊んで家の中へ砂を持ち込むのを嫌うので、外遊びをさせず、食事はかなり大きくなるまでお母さんが彼女の口に入れていました。

○外の世界に触れて、自分を失う

彼女が幼稚園へ行く年齢になり、お母さんは果たして彼女が友だちの中に入っていきけるかとても心配でした。けれども入園テストの時も入園式も大して混乱した様子がなく救われたとのことでした。むしろ幼稚園へ行くとはしゃぎまわり、目立ちたがるのでびっくりしたという

ことです。ところがある日迎えに行くと、先生がいつになくこにこと笑いながら彼女の手を引いてきて、「昨日お父さんとお母さんが大喧嘩をしたんですって？」と言うのです。一瞬何を言われたのかわからないでいると、彼女はその日、登園するなり先生たち一人一人に「ねえ先生」と訪ねていき、最後は事務のおばさんにまで同じことを言ってしまったというのです。

結婚以来、波風を立てないようにということをやってきたお母さんなので、夫とけんかなど考えられないことです。ですから彼女が幼稚園でなぜこのようなとんでもないことを言ってしまったのかかわからず、お母さんには途方にくれるばかりでした。お父さんに話しても首をかしげるだけで、その時は大事件だった割に、意味がつかめないまま何となくやむやに終わってしまったようでした。

○幼稚園での芽が中学で大木に

小学校時代は大過なく過ぎ、この事件もすっかり忘れ

かけていたところに家出事件が起り、お母さんはとっさにこの幼稚園での出来事を思い出したということです。

彼女の家出は最初のうちこそ移動教室とか林間学校とあって穏しいられたのですが、度重なるうちについていか祖父父母に、そして両親りに知られるところとなり、両親、特にお母さんは、公然とおばさん、おじさんから非難を浴びることになりました。

しかしこうなってみて思うことは、あの子は小さい時から、私のこの家での存在（自分の気持ちを曲げてでも、夫の一族と波風を立てまいとしている）をわかっていて、自分のかわりに大それたうそを言ってみて、自分ではないかということが頭を離れないとお母さんはいうのです。そしてこういう結果になるのだったら、自分を取り繕ったり、相手にあわせてたりしないで、最初からありのままの自分でやってくればよかったと反省するのでした。また幼稚園の時にもっと真剣に取り組んでいたならば、今になって彼女に家出をさせなくてすんだのではないかと、悔んでも悔みきれない思いのようです。

うそにも意味が

今回は私たちに割と身近なうそについて取りあげました。自分も含めて人は皆窮地に追い込まれると、意識してか無意識かは別としてうその魅力にとらわれがちです。紙面の都合上、うそが習い性となっている二例しかとりあげられませんでした。この他に事実を誇張したり、針が棒大に尾ひれをつけるうそ、相手の関心を自分に引きつけようとしてつくうそ、相手が期待すること喜びそうなことを考えてついでにうそなど、うそにも様々なものがあるように思われます。しかしどのうそもそれが行使される時、花子さんのお母さんが見事に分析したように、その人にとって何か意味あるものとして機能していることに目を向けることが大切に思われます。

基本的な社会生活上のルールを教える

しかし事例Ⅰの一郎君の場合は、うその意味を考えることに加えて、豊かな時代に育った世代の、一つの社会

病理現象としての要素が加わっていることも否定できないように思われます。冗談まじりに、今の子どもたちにとって「あなたの物は私の物」という感覚は、当り前なのだろうがという人もおりますが、駅前に置いてある自転車を黙って失敬して、どこにでも放置するあの神経は、「借りた物は返す」というルールをきちんと教えて来なかった私たち大人に責任があるのではないかと胸が痛む思いがします。また仮りに注意したところで「ちょっと借りただけ」との答が返ってくるのも今や常識ですが、単なる言い逃れに終わらせるのではなく、基本的な社会生活上のルールを、小さい時から体を通して教えていくことが必要なのではないでしょうか。

幼児だからと見過ごすと大事に

稿を終わるに当たって、最近よく問題行動の早期発見とか、子どものサインを見落とすなということを言われます。今回取りあげた二例はいずれも幼児期に、思春期になって本格化した問題行動の芽がみられました。しかし

うそというのは割と身近な問題行動で、「うそも方便」ということわざがあるほどですから、社会的に容認されている部分があることも確かです。また子どもであるというだけで、問題行動の芽として出てきたうそも、問題視されることなく見過ごされてしまう可能性が大きいこともこの二例は物語っているように思われます。これを機に、私たちの周囲にうずまいている様々なうそに目を向けて、その意味を考えてみるのも面白いのではないのでしょうか。

一郎君と花子さんの二人からは、習性となっているうその背景に、その家の人間関係の縮図を見る思いがして、うそをつく子どもに視点をあてて、問題行動の改善を考えがちな自分の姿勢を、改めて検討しなおしてみる必要を感じさせられています。

(東京都立教育研究所)